

*教室で（複数の生徒と）

体育が終わると、俺は体操服を着替えようとしたが、クラスの奴らに囲まれた。

「ねえねえ、虚木君。さっきの授業さ、先生としてたから、パンツびしょびしょに濡れてるんじゃないの？大丈夫？」

「えっ…」

筋肉質な短髪の男子生徒が俺の背後に立っていた。俺が振り返ろうとしたら、突然彼に俺の股間をまさぐられた。

「ちょっ！？やめっ…！あっ♡」

「ほら、もうパンツの中ぐっちょぐちょじゃん♡あっ♡虚木君のチンコ萎えててかわいーね♡」

「んっ♡やめっ♡っ♡」

「やめるわけねーじゃん♡わー♡マジでかわいい〜♡
なんか良い匂いするし♡ねえねえ、アタシと良い事し
ようよ♡」

俺が抵抗しようとする、後ろにいたオネエ口調の男子生徒が俺の体を羽交い絞めにした。後ろにいた男子生徒のチンポは既に固くなっていた。俺は尻にゴリゴリ当たるチンポを感じながら、困った様に皆の顔を見た。

「えっと……あの、」

「先生たちばかりズルいよねえ。アタシらだっ
てしたいのに♡」

「やっぱりパンツびしょ濡れだったんやな♡なあ、このまま履いてるの気持ち悪いやろ？今日は俺のパンツ貸してあげるわ。ほら、それ脱いで早く俺の脱ぎ

たてパンツ履いてええで♡ほらほら遠慮せずに、どぞ♡」

「えっ!？」

あれよあれよという間に、俺のズボンとパンツが脱がされていく。周囲にいた生徒たちも体操服のため、ハーフパンツを少しずらすだけで、チンポを丸出しにさせた。皆のチンポは緩く勃起していた。

(もしかして、これ全部俺に入れて犯してくる気? 何ソレ……それって、それって……っ、最高じゃん…♡)

俺はヨダレが垂れそうになったが、なんとか我慢してゴクリと唾を飲み込んだ。

ゴリゴリと股間を押し付けられながら、俺は荒い息のままキスをされた。イッた後にキスをされるのは好きだ。気持ちいいし、愛されてるみたいで幸せな気持ちになれる。

「虚木君の許可も出たことだし、俺たち皆、虚木君に愛して貰おうぜ♡」

「じゃあさ、全員で虚木君に突っ込んじゃう？♡あーでも、お昼時間で足りるかな？」

「そんじゃあ一人、一分突っ込めばいいんじゃない？三十人はいるだろ？それでギリギリ時間足りるんじゃないの？」

「あはっ♡虚木君、お昼食べる時間ないじゃーん♡」

「つーか、一分とか短すぎるだろ。でも、それしかねーか。しゃあねえな……♡ま、今日はそれで許してあげるよ、虚木君♡」

周囲にいた同級生たちが俺を囲んだ。俺を机の上
に仰向けに押し倒すと、一人目の生徒が俺の股の間
に入って来た。

「えっえっ？」

「つーわけだから、頑張っや。虚木クン♡一人一分
な♡誰かスマホで時計っというてな♡」

俺が戸惑っている間に、俺の両足が左右に押し広
げられた。一人目の生徒は、目の細い狐顔のイケメ
ンヤンキーだった。関西弁を喋っているのは彼だけ
だ。彼は俺の両手をぎゅっと握ると、頭上で固定し
た。

「こうやって手繋ぎながらセックスしたら、絶対気
持ちええと思わへん？♡俺、めっちゃドキドキしてき
たわ♡」

眼鏡君は最後に俺の背中やお尻にキスをすると、俺からどいた。にゆるるっ♡とチンコが抜けていき、俺が振り返ろうとすると、すぐに別のヤツが俺の中に入ってくる。ズルリッ♡ズンッ！♡

「っ♡あっ♡」

「次はアタシね」

今度は俺の片足だけあげられて、横向きの姿勢でチンコを挿入される。先ほどと違う位置にチンコが深く刺さって、俺は気持ちよさで頭が真っ白になる。

「ああっ！？♡っ♡深い♡なにこれ♡なにこれえ♡」

「んっ♡いい具合だわ♡動くわよ♡ほら頑張っ♡」

パンパンパンパンッ♡